

緑の地球

GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力



大同県徐郷。10年前は典型的な浸食谷がみられたが、いまはマツが育って風景が一変した。GENが植えたのはほんの一部

Contents

- 昨年末の大同あれこれ P 2
- 比良間伐作業に参加して P 3
- 新連載「あのひとこの人」 P 5
- 新連載「植物屋のこぼれ話 (続編)」 P 6

2005.1

101

昨年末の大同あれこれ

高見 邦雄 (GEN事務局長)

昨年末に1週間ほど、大同を走りぬけてきました。「零下25度、できるだけ着込んできて」といわれたのですが、ほんとうは暖冬。分厚いダウンジャケットをもてあました。

★順調な新苗圃の建設

新しい苗圃は工事が順調にすすんでいました。9月着工のため寒くなるまで日がなく、今春からの育苗にまにあうか心配だったのですが、以前の小老樹（水不足で伸び悩んだポプラ）は整理され、7ha強が平らにならされ、荒起こしてありました。管理棟も立ち上がり、あとは塗装を残すのみ。灌漑用の井戸も完成し、88mの深さから1時間50m³の水を確保できます。スムーズにすすんだのは、暖冬のおかげといいでしょう。



困ったこともあります。中国経済の急速な膨張で、エネルギー不足が深刻です。数年前に1トン60元まで落ち込んだ石炭価格が、ことしは200元超。石炭の街、大同は沸き立っており、そのおかげで賃金相場が急上昇し、労働力の確保がむずかしいんです。内蒙古から出稼ぎの集団を呼び込んで解決したんですけど、その事情は苗圃のオープン後もつづきそう。管理棟の部屋数をふやし、宿泊できるようにしました。大同事務所には大同市林業局で定年を迎えたベテラン技術者が2人いますから、そういう問題に臨機応変に対処できます。

★処理水で飼っている金魚

環境林センターは2001年からの急速な拡大をこなし、安定期にはいっ

たようで安心できます。土壤浄化法による污水处理施設は順調に稼働しました。というより2年目のはじめにいくつかの改善を加えたところ、処理水の水質は著しく向上しました。宣伝のために処理水で飼っている金魚がたくさんの子を生まれました。冬期は零下30度近くまでなりますので、池の水を抜き、温室内の水槽に移しているんですけど、もうこれ以上はふやせません。来年はどうなるんでしょう。



★霊丘植物園の湧き水

霊丘自然植物園は植生がずっと回復してきています。樹木の育ちやすい日陰斜面（陰坡）ではリョウトウナラなどが伸び、乾燥の厳しい日向斜面（陽坡）でも野生のモモ、灌木のトネリコなどが緑を広げています。敷地内の一角に薬草園をつくる計画で、その準備もすすみました。

池本和夫さんが泊まり込んでレポートしてくれたように、小鳥の数も種類も増えています。ありがたいことですが、最近は10数羽のキジが間断なく苗畑を襲い、蒔いたばかりのドングリなどをつつきます。ノウサギの数も増えてきました。悩ましいことです。

重要な変化は、敷地内の下部で、湧き水が増えていること。そもそもここを選んだのは、この湧き水にひかれたからです。育苗するにも、園内に植えつけるにも、最低限の水は必要ですから。谷筋の数か所から湧きだし、直径4～5mの池に集まっています。澄み切ったきれいな水で、私もおっかなびっくり口にしましたが、なにご



植物園の湧水量はどう変わるのだろうか

とも起こりませんでした。

園内で緑が濃くなるにしたがって、この湧き水がどうなるかが最近の関心事です。地元の技術者たちは、増えているといいます。なるほど、新しく明瞭な湧き口ができたところもありますし、どこからか湧きだしてジメジメしているところもあります。つごうのいいことに、この植物園の敷地は扇形に広がり、いちばん低い扇の要の位置に、あの池があるんですよ。降雨時の表流水、そして湧き水はすべてここに集まります。

池に集まる水の量と降水量とを継続的に測定していけば、植生の復活、森林の再生による水収支がどうなるか、貴重なデータがえられるでしょう。可能なら、ことしの4月くらいから、この作業に取りかかります。

★乱開発と深刻な汚染

中国はいま「中華全国総工事現場」で、鉄もセメントも不足しています。そのために霊丘県を中心に、たくさんの鉱山が開削されているんですけど、規模は零細で、稼げるうちに稼げ、



霊丘自然植物園のふもと。下流への影響が心配だ



国際ソロプチミスト 奈良で成果を報告

というのがポリシー。安全や環境は省みられません。植物園の入口近くに鉄鉱石の中間処理場ができ、上寨河の水で鉱石を洗い、汚濁した水を未処理のまま河に戻しています。その下流の水はもうまっ茶色。このような鉱石には重金属が含まれる可能性があり、健康被害が心配です。上寨河はすぐ下流で唐河に合流し、河北省の西大洋ダムに注ぎます。このダムは河北省の重要な水源であり、2007年からは北京の水源になる予定。

同様の乱開発が一帯で盛んなんですけど、いま霊丘は大同中で経済発展の顕著なところとして注目されるばかりで、負の面は誰もが指摘しにくい雰囲気のように。経済の急成長が光とすれば、影のところにこのような問題が潜んでいるわけです。

国際ソロプチミスト奈良（現在は6クラブ）の支援は、緑の地球ネットワークが大同での緑化協力を開始した直後から始まり、すでに13年もつづいています。2004年12月1日、高見事務局長がこの間の発展の経緯と成果を報告し、今年度分の協力金を6つのクラブの会長から受け取りました。

この協力が飛躍したのは、1994年5月、国際ソロプチミストの独自の協力団が渾源県を訪れ、小学校付果樹園の建設を応援してからです。2000年春にも、主だったメンバーが

現地を訪れ、満開のアンズの花を楽しみました。

初期の私たちの活動はモタモタしたり、失敗が多くて、気が気でなかったと思うんですけど、ほんとに一貫した支援をいただいたんですね。昨年末の集いには、94年に現地を訪れた人も参加しておられ、はじめて目にした黄土高原の荒涼とした印象、県のホテルでいきなり熱湯が噴き出し、やけどをした話も飛び出しました。そろそろまた大同にきてもらい、大きく成長した協力事業をみてもらいたいものです。（高見）

比良山間伐作業に参加して

洪 詩 鴻（阪南大学助教授）

昨年11月28日、NPO自然と緑のフィールド・比良山麓馬ヶ背の国有林で、自然と緑のスタッフに指導をうけ、16人が参加して間伐作業をおこないました。

11月28日日曜朝、わが家は大騒動。5歳になるわが子が朝からはしゃいでいた。いつもなら、週末はゆっくり寝坊していたが、その日はおとなよりも早起きして前の晩に用意した山歩きの服装と水筒を身に付けていた。今日は山で木を倒しにいくと張り切っている。実はその日は家族3人で緑の地球ネットワーク主催の比良山間伐作業に参加することになっていた。

すべては初めての体験なので、何を持っていくべきか見当もつかない。電車に間に合うようにいつもより早起きしなければならぬし、持っていく予定のものを忘れてし、おとなのほうはつらかった。

おそらく日本で間伐作業を体験できる人は少ないだろう、特に違う地域からくる人（外国人とか。国という意識も概念もあまり好きではない）は。私は北京でいつも機嫌悪そうな顔をしている事務局長の高見氏に出会った縁で、こういう地道な植林・緑化という活動を知り、緑化協力活動

を通じた交流、人の心に木を植えようという言葉に共鳴して、国籍に関係なくこのすばらしいネットワークに加わった。ただ、わたしは普段の仕事の要領が悪くてなかなか時間の余裕がつかれず、いままで活動に参加することができなかった。今回は久々に休日に予定がなく、寝坊するのはもったいないし、他の趣味もなく、大衆娯楽であるパチンコさえ打つ能力もないから、案内をみて、久々に運動と、人々との交流もかねて参加を申し込んだ。

気楽な気持ちで行ったのはいいが、実際に作業してみるとなかなか体力がいる仕事だった。おまけにひとつ間違えば危険をとまなう作業であることがわかった。ただし、NPO自然と緑の指導員の指導どおりやって、予想通り木が倒れてくれると、またなんとも言いようがない爽快感があった。何十年間も育った木を切り倒すのは、最初はやや躊躇した。間伐は森全体の発展に良いことだと顧問の石原先生が説明してくれた。実際に現地を

見て、なるほどと納得した。自然の摂理は人間の恣意的な想像と操作でそう簡単に変えられるものではないとあらためて認識した。自然、社会、そして人類自身も含めて、自然科学のみならず、社会科学もこういった原点をときどき振り返る必要があるかもしれない。

実は今回、京都大学人文研究所にきている米国の私の知り合いを誘って一緒に参加した。かれは宗教学の専門家だが、今回は日本に来て最高の体験だったと感想を漏らしてくれた。そして、かれの日本在住の知り合いに、こういう活動、ネットワークに参加しろと口々に説いてまわった。昨年末に彼に連絡をとったら、つい最近京都の国立地球環境研究所から研究参加の声がかかったのだ、もう1年日本に滞在すると、大いに日本ファンになったようだ。新年から地球環境問題に独自の角度から取りかかろうとしているようだ。

「草木皆有情」。ふとこの言葉が浮かんでくる。かれも私も、おそらくわが子もこのような体験を積み重ねて「草木、自然、人間」について深く愛着を抱き、感銘を受けているに違いない。

2005 春の黄土高原ワーキングツアー参加者募集

冬の寒さが厳しい黄土高原も、3月末になって凍りついた土がとけはじめると、植樹シーズンの到来です。

春は毎年大同市南部を訪ねます。霊丘自然植物園の落葉樹はまだ芽吹いていませんが、大きく育った様子を見ていただけることでしょう。そしてもちろん、村の人たちといっしょに木を植え、子どもたちと遊び、農家に泊まる、GENのワーキングツアーならではの体験も満喫してください！

●日程：2005年3月27日（日）～4月3日（日）

往路CA928便（12時集合、14時出発）復路CA927便（13時着）※飛行機の時間は航空会社の都合で変更になる場合があります。

●費用：一般＝158,000円、学生＝148,000円（国際航空運賃、中国国内での交通費／食費／宿泊費、GEN年会費を含む。個人行動時の費用、旅券取得費用、空港施設使用料、航空保険料は含まない）。※中国国際航空利用 ※関西空港発着 ※成田発着便利用ご希望の場合は航空運賃の差額9,000円が別途必要です。

●定員：30人

●申込み締め切り：2月17日（定員に達し次第締め切ります）

●申込み方法：GEN事務所まで応募書類をご請求ください。



いまあぐできる GEN への協力

■会員になってください！

まだ会員になっていない方、ぜひ会員になってGENの活動をささえてください。また、環境問題や国際協力に関心をお持ちの知り合いに、会報の購読などをおすすめてください。

■カササギの森に参加してください！

1ha分5万円を1口として寄付を募っています。落葉広葉樹や花木も植えられ、ニワトリも飼うなど多様な展開をみせる実験林場“カササギの森”に、あなたも参加しませんか。

■緑化基金、運営カンパもとむ

金額はいくらでもけっこうです。運営費が特に厳しい状況にあります。みなさんの応援をお願いします。

■ビデオ『よみがえる森』ご購入を！

沙漠化、水不足など黄土高原の環境問題とGENの緑化協力を30分にまとめました。価格は5,000円、GEN会員価格は4,000円（送料別途）です。教材にも好適。小学校高学年から。

■絵はがき『中国・黄土高原』

橋本紘二さんの写真で制作しました。『春』『夏』『秋・冬』『緑化』の4種類、それぞれカラー8枚組、1セット（8枚）300円（送料別途）です。

■書き損じはがきを集めています

（書き損じ年賀はがき大歓迎！）

書き損じはがき、古い未使用のはがきを回収しています。通信費にあてています。あまったり書き損じた年賀はがきをご家庭にあれば、ぜひお送りください。お待ちしております！

■商品券などをお寄せください

ご家庭で眠っていて使うあてのない図書券、文具券、各種商品券がありましたらお送りいただけると嬉しです。

■ボランティア募集

会報発送や事務所の手伝いなどのボランティアが随時必要です。ボランティア可能な曜日、時間帯をご連絡ください。来ていただきたいときにGEN事務所から連絡します。

■出版物を購入してください

『ぼくらの村にアンズが実ったー中国緑化協力の10年』高見邦雄著／日本経済新聞社／本体価格1,600円（GENでは1,600円＋送料で取り扱っています）

『中国黄土高原～砂漠化する大地と人びと』橋本紘二写真集／東方出版／本体価格6,000円（GENでは送料込み6,000円で取り扱っています）

※ご注文はGEN事務所まで。

GREENなんでも勉強会 大阪市下水道科学館見学

大同の環境林センターでは、小規模な污水处理施設を建設しました。近隣の団地の汚廃水を処理し灌漑等に再利用しておおいに役立てています。

一方、日本の私たちの暮らしでは、配水管に流して目の前から消えてしまった後の汚水がどうなっているのかご存じですか。下水道科学館は下水のしくみと働き、その歴史から最新の技術までをわかりやすく紹介しています。館長さんに案内していただき、質疑の時間もうけます。この機会に見学して下水処理の認識を深めましょう。子どもさんの参加も歓迎です。

●日時：2005年1月22日（土）13時30分～16時頃

●集合：13時30分に阪神本線「淀川」駅

●参加費：無料（下水道科学館も入館無料）

●申込み：1月20日までにGEN事務局へ



メールアドレス変更しました！

プロバイダの都合により、メールアドレスが変わりました。新アドレス……gentree@s4.dion.ne.jp

雲南だより〔3〕 春城の寒い冬

茂田井 円 (GEN 関東ブランチ)



12月24日現在の室内温度は13度、夜間の外は2度。寒いですが、でも昆明の人が「春城」と信じているので、暖房設備はほとんどなく、家族で風邪のリレーを繰り返しています。春の城は、錯覚でした。

天気のよい日は小春日和の温かさ。多くの人は日差しを求めて戸外に出ます。曇りの日は底冷え。下着を着込みシャツ、セーターの上に外套をはおって過ごします。女性なら襟首のスカーフもかかせません。下着はいわゆるばばシャツ・すててこスタ



路上で暖をとる街の人びと

イルで「保暖内衣」と呼ばれるもの。底冷えのひどい昆明では爆発的な売れゆきで、いまや老いも若きも身に着けているようです。中国では1997年に少数の企業が売りはじめ、現在、300企業以上がしのぎをけずっていると（「春城晩報」12月18日）。品質のばらつきが激しいため、今年11月1日付けで国から內衣の保暖率や質量の表示などを義務づけることも通達されました。

11月ごろから雨季から乾季に移るため、水力発電を主力に据えた電力事情も悪化します。通称欠電局と呼ばれている供電局という役所が、計画的に地区ごとに停電させていくのです。近年までは局員が電線をはさみで切って停電させ、またつないで復旧させていたと知人に聞きました。

雲南省の水力発電量は現在、年約4500億キロワット時で全国2位。火力発電もあわせると省内は十分足りるのですが、年約70億キロワット時を広東省に送電し、さらに今年10月

からはベトナムにも送電しはじめました。新聞の「今日の停電速報」の横には、10月は2026キロワット時を送電し、約87万米ドルを稼いだとあります。さらに12月1日には100名以上の学者を昆明に集め、「水エネルギー資源と生態保護問題」に関する「献策」の場をもうけました。その上で雲南省、四川省、青海省を跨ぐ金沙江（長江の上流域）、瀾滄江（メコン川上流域）、怒江及び周辺の河川に大型水力発電所を2020年までに建設し、国内沿海地域及びタイ、ベトナム、ラオス、ミャンマーに送電する計画を発表しました。おそらく西部大開発の狙いの一つはここにあるのでしょう。

雲南省は、太陽熱温水器など電気に頼りきらない設備も予想以上に普及しています。現在、環境に優しい冬の過ごし方をしている人びとが、沿海地域の経済発展の犠牲にならないように願いたいものです。

あの人 この人

岡田光司さん（大阪市）

GEN事務局から便りがきた。「新しくはじめる会員紹介コーナーに載せるので自己紹介文を送れ」。ありがたい話だ。92年の準備会の時から関わってきたが、最近は会報を楽しんで読むだけ。参加しているというのもおこがましい。そんな私を取り上げるという。ありがたい。

振り返るといろんな思い出がうかぶ。発足当時はよく議論した。黄土高原の緑化とネパールへの協力の両立の困難さ。中国を焼けた野原にした日本人としての当事者性の問題。事務局員のボランティア性。

そして、北海道でアイヌの方がたと一緒にはじめたナショナルトラスト・チコロナイの独立。

NPO法人チコロナイには今も参加させていただいている。

自然と親しむ会にも親子でよく参加した。真っ暗なトンネルを懐中電灯だけで進んだ福知山線廃線跡のハイキング、キノコを集め鍋をつついた比良山系の散策。六甲山での木の実を使ったクリスマスツリー作り。小学生だった娘と息子は普段と違う体験に異様に喜んでいて。その娘も



今春、大学生になる、息子は高2だ。私の代わりに黄土高原へ行って来いと水を向けるのだが、やるのがいっぱいあるらしくその気にならない。自然と親しむ会のように親子で黄土高原を訪ねる日がいつくるだろうか。

蛇足ですが、最近ウェブログ（ブログ＝インターネット上の公開日記）で「水呑地藏日記」（<http://blog.goo.ne.jp/tukasahajime/>）をはじめました。よければ見てやってください。

* * * * *

投稿募集！

GEN会員の紹介コーナー「あの人この人」の原稿を募集します。自己紹介、GENとの関わり、アピールしたいことなどを600字程度にまとめ、顔写真（似顔絵か内容に関する写真でもOK）をそえて、GEN事務所まで郵便かeメールでお送りください。

植物屋のこぼれ話 (続編) その1

立花 吉茂 (GEN 代表・花園大学客員教授)

●ワシントン条約と多様性条約

生物多様性条約はその理由が一般には難解である、と聞いたので書く気になった。ワシントン条約は絶滅危惧生物を絶滅から救い残そうとするものだが、あまりにも少数になると、遺伝的に多様性が失われ、ヒトの保護から野生に戻せなくなるため、まだ種の多様性が保たれているうちに保護しようというものである。ひとつの地域の生物全般の多様性と、種の多様性とは意味が異なっているから、この点が難解であるらしい。雑種性 (Heterogeneous) と純系種

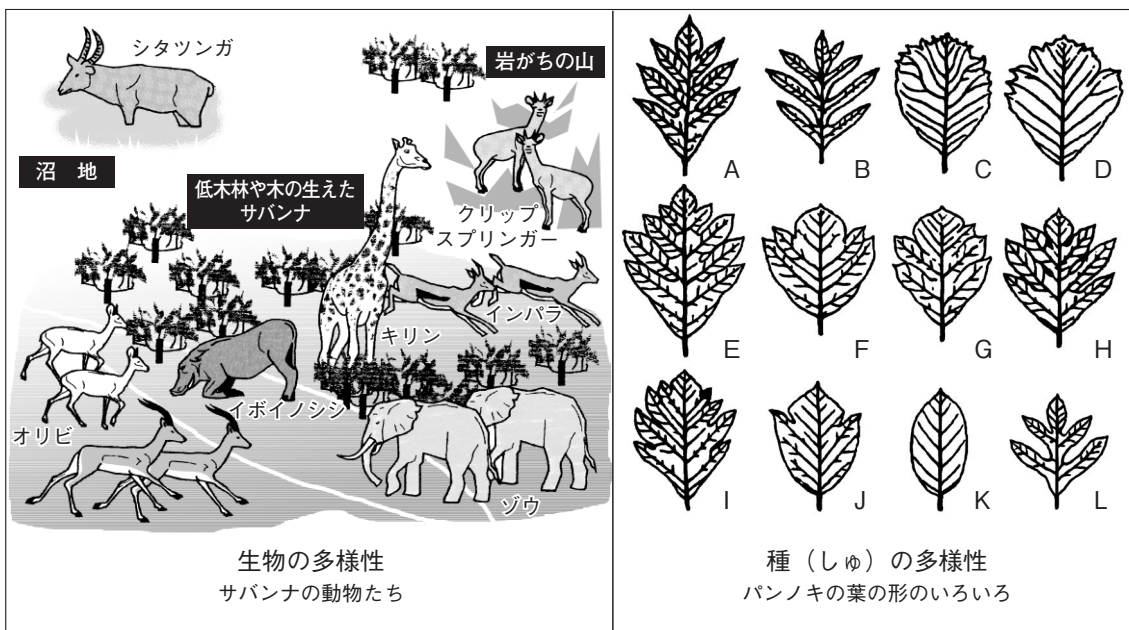
(Homogeneous) といえば、なお難解だろうか？ ひとつの種のもっている遺伝的バラツキ (目に見えるものと見えないもの) が種の多様性であり、これが生物の生き残り戦術のひとつなのである。野生植物の同じ属の隣の種とは明らかに質的な差があるが、その境界では分けるのが困難なほど似ていることがある。しかし、栽培植物はよくそろっているので種をまちがうことはめったにない。品種でさえまちがうことは少ない。栽培植物はヒトがいなくなれば絶滅するだろう。これは特殊なものなの

である。筆者はかつて、琵琶湖のヨシの種子繁殖の技術を開発したことがある。近年、ヨシの再生に、種子よりも早く苗ができるからと挿し木でふやしていると聞いたことがある。これでは多様性が見出されず、ヨシ帯再生の意味が半減してしまう。いろいろな遺伝子を全て残すということは解り難いことらしい。

ラムサール条約というのがある。これはある地域の生態系を残そうとするもので、湿地帯ならびにそこに住む全生物を保護しようとするものである。湿地に住む生物は湿地がなくなれば絶滅する。また、湿地はヒトに開発されやすい。そこで保存の必要があるわけである。琵琶湖がラムサール条約に入っている。水深 100 メートルもある大きな湖が湿地とは

理解に苦しむが、地球規模で眺めれば小さなものだし、湖の沿岸帯はたしかに湿地帯である。

わが国は、国際的な条約には参加したが、内容をちゃんと理解してより良くしているか、はなはだ疑問である。



編集部から

お知らせと訂正

立花代表の新しい連載『植物屋のこぼれ話(続編)』がはじまりました。「続編? 前に、『植物屋のこぼれ話』って連載が会報にあったの?」という

と、そうではありません。念のため。では、なぜ続編なのか。それは、ご存知の方もおいででしょうが、立花代表に『植物屋のこぼれ話』という著書があるからです。タイトルどおり、植物のいろいろな話が親しみ

やすい文章で書かれているうえ、豊富な写真(若かりし日の立花代表の写真も!)が収録され、とても面白い本です。現時点で入手可能なので、関心のある方はぜひご一読ください。『植物屋のこぼれ話』立花吉茂著/淡交社/1,529円(税込)

* * * * *

訂正

「緑の地球」100号で、いくつか間違いがありました。お詫びして、訂

正いたします。

6 ページ左、本文写真下 5 行目

誤 「群衆」 → 正 「群集」

10 ページ下、ワーキングツアー予告

誤 ●日程: 2005 年 3 月 29 日 (日)

正 ●日程: 2005 年 3 月 27 日 (日)

15 ページ右、下から 16 行目

誤 会員数は 435 団体・個人

正 会員数は 635 団体・個人



黄土高原史話〈23〉

こだわるわけではないけれど

谷口 義介（摂南大学教授）

いま、新しい苗圃の建設作業が最終段階。

大同市から北東へ10キロほど行った地点に、7haの土地を確保。「小老樹」を抜いて整地し、井戸を掘り、レンガで管理棟などを建て、そのまわりを塀で囲み……。今春スタートの予定で、ここでは針葉樹の育苗がメインになる由。

問題は、新しい苗圃の名前を何とするか。

正面に白登山が見えます。そこで高見 GEN 事務局長から、「白登山苗圃」にしたら、という提案が。しかし、これには現地スタッフが気乗り薄。前回〈22〉で書いたように、漢の高祖劉邦が匈奴の冒頓^{はくとつぜんう}単于の40万騎に包囲され、7日目、屈辱的な和約を結んで脱出できた、いわゆる「平城の恥」の古戦場。2204年後の子孫にとっても、面白かろうはずがありません。「匈奴なんかには負けたんじゃない、寒さに負けたんだ」という負け惜しみの声すら。それを知ったうえで、さらに「冒頓苗圃」

案を出すとは、ほんの冗談とはいえ、ガオジェン（高見）先生もお人が悪い。

「遊牧民族が得意とする偽装の逃走戦術にまんまと引っかかった劉邦の将才のなさ歴然」と、杉山正明『遊牧民から見た世界史』はこきおろす。

『史記』匈奴列伝によれば、漢が匈奴と結んだ和約の内容は以下の如し。

- (1) 漢王室の皇女を単于の妃として差し出す。
- (2) 毎年、綿・絹・酒・米などを献上する。
- (3) 皇帝と単于との間に兄弟の契りを結ぶ。

戦いの後、匈奴の実力を知った高祖が、劉敬に命じて締結させたことになっていますが、それはおそらく記述上の後倒し。三条件は包囲の重圧のさなかで約されたに違いありません。漢にとっては屈辱的な内容ゆえ、陳丞相世家にいうごとく秘密にされ、かつまた匈奴列伝では、

「そのころ、匈奴へは漢将がし

ばしば衆兵を引きつけて投降し、また冒頓は常に往来して代〔大同市一帯〕の地を侵した。漢ではこれをうれえ、高祖は劉敬に命じ、……和親した」

と、ぼかして書いたのでしょう。

司馬遼太郎は、司馬遷を敬仰するあまり、「司馬」遷には「遼」（はるか）に及ばない、という意を込めてペンネームにしたとか。大阪外大で蒙古語を学び、『草原の記』なども書いて遊牧世界に詳しくった司馬遼。『項羽と劉邦』のあと、ぜひとも『冒頓と劉邦』を書いてほしかった。

1977年8月某日、オルドスに向け北京空港を飛び立った同氏、午前9時20分ごろ、機上から地図と照合しつつ白登山を探したが、確認できなかった、と。（『歴史の舞台』）



匈奴の騎馬軍がここで劉邦を包囲していたかも……

新スタッフ加入！

今年から GEN でお世話になることになりました会田伸子です。昨年半年間陝西省の農村に入り、日本大使館草の根援助プロジェクトの一環として水質調査を担当していました。大同へは2回うかがい現場を見せていただき、ご縁あって GEN で仕事することになりました。これ以前は北京の大学を卒業後、6年半東京で働いていました。

関西で働くのは今回が初めてですが、生まれは西宮で、3歳まで生活していました。関西暮らしはそれ以来でとてもワクワクしています。みなさんと楽しくお仕事をさせていたきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

本の紹介

『中国環境ハンドブック』2005-2006年版／中国環境問題研究会編／蒼蒼社／本体価格 3,000 円

広い中国のさまざまな環境問題を、各界の専門家や NGO が論じている。中国の法令や統計、関係する NGO のデータなども掲載され、中国の環境問題を勉強したい人におすすめの充実した1冊。日中国交回復直後から主に公害分野で中国とかかわってきた先達が当時の様子を語る文章が印象的だった。政治や文化の違いに苦労するのはいまにはじまった話ではない。むしろ往時の方が大変だったわけで、それらをこえてなお、連綿とつづく日中環境協力の一端に、GEN は位置しているのだと感じさせられる。

『生態学入門』日本生態学会編／東京化学同人／本体価格 2,800 円

「緑の地球」100号記念座談会で、石原忠一顧問から紹介された本。残念ながら会報では割愛してしまったが、従来植物の専門家と動物の専門家で用語が違うなどして話が通じないこともあった生態学を、まるごとの生態系の視点から論じたはじめての本という紹介だった。学問がどんどん細分化して全体像をみることがむずかしくなっているが、生態系は全体のバランスが肝要。入門というには少し手ごわいけれど、勉強になりそう。



情報ひろば
いっしょなかたち

甲浦ポンカンをどうぞ

土を大事にして有機肥料のみ、農薬散布もできるだけひかえた栽培をつづけてきた田中さんのポンカンが、高知県の「8割減農薬農産物」の認証をうけました。

●ポンカン（低農薬・有機栽培）

A	3L/2L	5kg	化粧箱	4,000 円
B	〃	〃	普通箱	3,700 円
C	〃	3kg	化粧箱	2,600 円
D	L	5kg	化粧箱	3,500 円
E	〃	〃	普通箱	3,200 円

○出荷：2月まで

★送料別途。関西 630 円、関東 840 円（20kg まで）。

★お申し込みは田中隆一さんまで。

〒781-7411 高知県安芸郡東洋町甲浦
TEL/FAX. 0887-29-2500

※売上の一部をご寄付いただいているので、ご注文の際、「GEN の紹介」と一言添えてください。

*当欄掲載のイベント情報は掲載時点のもので、その後変更になる可能性があります。主催者にお確かめのうえ、ご参加ください。

*当欄に情報をお寄せください。本紙は奇数月 15 日ごろの発行で、締切は前月の末です。なお、紙面の都合により掲載できない場合があります。ご了承ください。

NGO-JICA 協議会

地域でつながる NGO と JICA

NGO と JICA の関西における連携事例を振りかえり、よりよいパートナーシップを考えます。

●日時：1 月 29 日（土）13 時 30 分～17 時

●場所：JICA 兵庫（神戸市中央区脇浜海岸通 1-5-2。JR「灘」駅、阪神「岩屋」駅から南へ徒歩約 10 分）

●内容：事例紹介 1) 開発教育支援事業 2) 草の根技術協力事業 3) 研修員受入事業／質疑応答／NGO-JICA 連携スキームの紹介／懇親会（会費：500 円）

●主催：JICA 兵庫、JICA 大阪、関西 NGO 協議会

●申込：氏名、所属、連絡先を明記して郵送、fax、メールで下記まで。
JICA 国際協力推進員（兵庫）三木
（〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸

通 1-5-2 fax 078-261-0342 e-mail :
jicadpd-desk-hyogoken@jica.go.jp

編集後記

古書店で「神戸新聞の 100 日」という本を見つけました。阪神淡路大震災で社屋壊滅という非常事態のなか、新聞を発行しつづけた神戸新聞社の奮闘をつづったドキュメンタリーです。圧倒的な自然の猛威の前に人間は無力でなすすべもないけれど、ただぼう然と立ちすくむのではなく、できる限りの努力をつくそう。そんなメッセージが伝わってきます。

震災後 10 年を前にした去年は、国内でも、世界でも大災害があいつぎました。スマトラ沖地震・大津波の被害には言葉ありません。募金しかできませんが、1 日も早く安全な生活が取り戻されることを願います。

1 月 17 日、この会報を発送します。
（東川）